Body Trade

肉体交換SNS

Social Network Service

オムニバス

Adult Only

Tarota

ＴＳＦドリーム文庫 06

Body Trade

肉体交換SNSオムニバス

Social Network Service

Tarota

肉体交換ＳＮＳ

オムニバス

Ｔａｒｏｔａ

０．肉体交換ＳＮＳ　簡単！安心！解説本　００５
１．レイヤー・トレード　０１７
２．気ままに！ボディ・シェアリンク生活　０７１
３．アカウントファック　１３１
Ｅ．エピローグ　１７８
あとがき　１９０

０．肉体交換ＳＮＳ　簡単！安心！解説本

炎天が支配する直轄領を脱し、会場の高い天井に護られた屋内へと脚を踏み入れると、それだけで涼しく感じて、改めて直射日光の暴威を思い知らされた。視界に入る光量も激減したから、一瞬のブラックアウトに目をしばたたかせる。すると飛び込んできたのは会場内にいる人、人、人の洪水で、立ち昇る汗が作り出しているのか、人々の影が蜃気楼のように揺らめいていて、即座に俺の口から「うへぇ」と声が漏れ出した。

今、俺が居るのは日本最大級の同人誌即売会の会場だ。朝並んで入った同志達の他にも、サークル参加者やら、俺らが入場した後にも増え続けているのだから混雑ぶりは当然の結果だ。それに、初めてきた訳ではないから混雑は解り切っていた事だ。

けれども、炎天下の外周列を巡り、ズシリと重たい紙袋（せんか）を抱えて凱旋した今、改めて会場の中を見れば、出るのはゲンナリとした声だけだった。

それでまぁ、どこかで休憩しようと思うも外になんぞ戻りたくはないし、さりとて会場内にある店舗へ向かおうにも、肉の壁と形象されるような『みっしり』と詰まった列を突っ切る気力なんてない。だから一先ずは人の流れに乗って外側の列を回り、縦断できそうな空いている列を探す事にする。

そうして、えいやっと迷い込んだのは同じ会場内とは思えない閑散とした通りで、買い手が

現れたのが珍しいのだろうか、両サイドのサークル列から強烈なオーラが籠められた視線が俺に突き刺さってくる。

『いやいやいや……俺はただの通行人ですよぉ～』

そんなオーラを発しながら足早に通過する。いやしようと思ったのだ。

ところで、運命の出会いと呼ばれるモノがある事をご存知だろうか。もしくは、何かに呼び止められる感覚というのだろうか。偶然の出会いと形容するにしては、後から考えれば必然と呼ぶほうが相応しいような、そんな遭遇経験だ。

その時の俺は、確かに偶然その道を選択し、まさに通過する為だけだった筈だのに、とあるサークルのとある一冊の本に目が引き寄せられていたのだ。いや、一旦は視界を掠め過ぎ、遅れて処理された脳内が脚を止めさせたのだ。振り返り遠目で脳内に止まった文字を確認する。

『肉体交換』

色紙にタイトルが印字されただけのシンプルな表紙に、俺の気を惹く文言が確かに踊っていた。踵を返すと一目散に捉えた対象物をむんずと掴む。良く見返してみると、薄い本のタイトルは『肉体交換ＳＮＳ　簡単！安心！解説本』となっていた。

肉体交換ＳＮＳ？　聞いた事も無い文言に俺の眉間は自然と寄って、訝しむ視線が対面の販売サークル員と交わった。

「ど……どうぞ。良かったら、中を見てって下さい……」

引き攣った笑みで促す声に、俺はフンっと鼻息一つついて表紙を捲る。『素晴らしき肉体交換の世界へようこそ！』なんて文字が躍っていやがる。なんだこれは、サイエンスファンタジーとかそういう系統の創作文学なのだろうか。俺は訝しげな視線のままに読み進めた。

○　●　○

貴方は別の誰かになってみたいと思った事はありませんか？

憧れの人がどんな暮らしをしているのか、興味を持った事はありますか？

また、街で路上で擦れ違う誰かは赤の他人ではあるけれども、それぞれに生活や人生を抱えている訳で、それが一体どんなものなのか気になった事はありますか？

そうです。人間誰しもが違う人生や生活を送っている訳で、それがどんなものなのか何ていうのは絶対に理解できない世界なのです。いわば、隣り合った異世界なのです。

けれども、この画期的なツールを使えば不可能が可能になります。

『肉体』と呼ばれている僕達、私達を覆う外装を交換し、他人に為りきる事ができるのです。

そうです。

この本を手に取ったという事は恐らく皆さんはご存知無いでしょうが、この現代、現時点に於いて、驚く程簡単な方法で多くの人が、『肉体を交換する』という非現実的な現実を謳歌し

ているのです。

勿論、この文章を執筆している僕だって、そんな非日常を日常とした生活を送っています。

送りまくっています。

色んな他人の『肉体』を借りて、様々な体験をしています。

……すいません。見栄張りました。そこまで頻繁ではありません。

けれども、このツールに出会わなければ決して体験できない、近くて遠い異世界を僕は知りました。

勘の良い方ならもうお解りですね？

そう、異性の世界です。

僕の本来の性は男ですから、女の人の身体を借りました。

女性としての立場で世界を見る。そして女性にしか入れない場所に入ったり。女性だけが感じえる感覚も様々に理解する事ができました。どうせ、エッチなことばっかなんだろうって？

そうですよ！　羨ましいでしょ！

そんな訳で、この本はそんな素晴らしい『肉体交換』を驚く程の手軽さで享受できるツールの紹介本です。この本を手に取ったのも何かの縁です。是非、一度試してみませんか！

○●○

序文を一気に読み終えた俺は興奮に包まれていた。

「こ……こ……これ……」

言葉が見つからずどもりながら指先でページを指差していると、察したのだろう相手が「ええ、本当の事ですよ」と笑顔で答えてきた。ページを捲ると目次になっていて、薄いページ数ながら色々と情報が詰まっているようだ。

「か……買いますよ……本……えっと……」

慌てて財布を取り出し、代金を支払う。

「ありがとうございました。あ、その『肉体交換ＳＮＳ』なんですが、会員制の紹介サイトとなってまして……もし参加されたくなりましたら巻末の連絡先の方までどうぞ」

「あ……ああ……そうなんすか。ところで、今の中身は……別人だったりするんです？」

ちょっと興味があってそんな質問をすると、「どっちだと思います？」と質問に質問で返されてしまった。だから俺は「いやぁ……本人ですよね？」と即答した。

「ぁ～　当たりです……サークルの売り子体験したい人！　とかって募集したんすけど、全然集まらないんすよねぇ～」

まぁ、そりゃそうだろうよ。心の中でツッコミをいれながら、買った本を掲げるのを別れの挨拶とした。

それから空いているサークル列を今度こそ通り抜け、三階にある軽食コーナーへと登る。眼下には通行の邪魔に為らない場所を使って無料で休憩している輩の密集地帯と、会場ホールを行き来する人々の流れとがごちゃ混ぜになった芋洗い場が展開されており、上から眺めるとちょっとした支配者気分になれるのだ。ゴミのようだろう？

ほくそ笑みながら優雅な軽食を済ませ、紙コップに注がれたドリンクを片手に戦利品を嗜む。ガサリっと最初に触れたのは最後に入れた戦果で、だから例の『肉体交換ＳＮＳ解説本』であった。

「本当にこんな事がねぇ…」

一息ついてから改めて見れば、やはり現実的に進行形の事象とはとうてい思えない。パラパラと捲ってみた『実例編』によれば、なんとまぁお気軽に身体の貸し借りをしているのかと呆れてしまう。何せ、肉体交換ＳＮＳなるものの中には『急募板』なるものがあって、例えばこんな具合だというのだ。

『１８歳の女でぇーっす！　バーゲンの並び代行お願いします☆　絶対に欲しいモノがあるんだ。期間は３時間。余った時間で私の身体好きにしてもいいよ！　でもエッチな本番は禁止！』

『今月もツラーイ生理の時期がやってきちゃった（涙）　女性の神秘に触れたい彼方。ちょっと替わってみてくれない？　期間は５日でぇーっす　明けた後は好きに弄ってもいいよ？』

こんな具合に、若い女性が気軽に男相手に身体を貸しているらしいのだ。大体は自分の望みやツラさを押し付ける為だが、期間を長めに設定してご褒美タイムを付与しているのがミソだという。うんまぁ、ちょっと女の子になってみたい気分って実際俺でもあるもんなぁ……案外、こんな交換も上手く機能しているのかもしれない。

いや、実際にあったとしてだよ。

実際、本当に……

……

いつの間にか唾を飲み込んでいた。

このマニュアル本、架空のモノだとしても良く出来ている。それに騙しだとしても、実際にちょっとくらいなら覗いてみたい気もする。俺はスマホを取り出していた。震える指先で奥付のメアドを入力していく。出会い系のヤバイとこだったらどうしようなどと悪い考えを過ぎらせながらも、俺は勧誘して欲しい旨をしたためたメールを……送信するためのボタンを……押下した。

『送信完了しました』

事務的な文言が画面に表示されている。一息つく間もなく。スマホに付属しているランプが緑色の明滅を放ち、メールの受信を知らせてきた。

「早いなぁ……おい」

恐らく相手は暇を持て余しすぎているのだろう。彼らのサークルがある島中まで人が押し寄せるには、まだ早い時間だし、悪いが飛ぶように売れるような本にも思えない。返信メールは勿論、肉体交換ＳＮＳへの招待メールで、俺は早速とリンク先をタップした。公式配信のアプリでは無いから警告文が出るが、構わずインストールするを選び暫し待つ。

すると、メニュー画面に赤字で『交』の文字が配された、いかにも妖しげなアイコンが表示された。それを起動させて、表示される規約文章をスクロールさせて、俺は『ちょっとだけピリっとするから気をつけろ！』という同人誌の文言を思い出して身構えながら『承諾』のボタンをタップする。

「あふぅ……」

解っていても痺れは中々のもので、俺が上げた何だか艶っぽい吐息に周りの視線が突き刺さる。意に介さないようにしてスマホ画面を見やれば、事前に読んでいた通りに自分が憶えてさえいない事まで明記された詳細なプロフィールが表示されていた。

気味悪く思いながらも暫し読みふけり、いやいやそうじゃないぞっと俺は『検索』メニューから『募集掲示板』へとページを遷移する。解説本に拠れば、ここで身体の交換相手を探すのが手っ取り早いらしい。『条件：急募』で絞れば更に効果的だという事だ。助言に従い操作しようとして、『付近の交換希望者が多数あります』という赤字のリンクがある事に気がついた。

早速とタップしてみれば、名前がズラっと並んでいて、所在地の欄が『東４ホール　リ１４

ａ』など、ああはいはい近場っすね本当に！　という事を実感させられた。リアルな感覚に興奮しながら、俺は条件を『女性』に絞り込む。やっぱどうせ体験するなら異性っしょ！　そうして表示された一覧を眺めていると、職業欄が『コスプレイヤー』なんてなっている人がいる事に気がついた。

「うへぇ！？　来栖ゆりか　ってあの！？」

衝撃を受けて言葉が口をついて、再び周囲の視線を集めるが、今はそれどころじゃない。

俺はドキドキしながら名前をタップした。『コスネーム：来栖ゆりか　本名：＊＊＊＊＊』そういえば、世間的に通り名の方が解りやすい場合は、そっちでしか表示されないと解説本に書いてあった。本名などは実際に身体交換がされた場合にしか明かされないそうだ。

残念ながら彼女に関してのプロフィールは、今見られる閲覧用では余り詳しい情報は解らなかったが、あの童顔ながらも反則的なまでに豊満な我侭ボディを有した、コスプレイヤーの来栖ゆりかで間違いないと添付写真が雄弁に語っていた。けれど残念な事に彼女は『貸出中』であるらしい。くそぉ。一体誰が彼女のスゴ素晴らしぃ肉体を使用しているんだと、嫉妬の炎がバーニングする。よせよ。俺に触れたら火傷しちまうぜ？

イラっとしながら俺は、『職業：コスプレイヤー』で絞込みを行う。さすれば忽ちに奇妙な名前でリストが埋め尽くされた。『りるん☆』『きゃなるぽ』『ｉｃｅＫｏｒｉｎ』……名前ではピンっとこないレイヤーさんも、タップ先の写真を一目見れば「ああ、あの娘か！」と納得

する有名所ばかりだった。けれどもいずれも『貸出中』の文字が虚しく躍る。

ぐぬぬ……リアルで歯噛みしながら、今度こそはと『みすずみみあ』の名前をタップする。表示されたのは完全ロリ容姿の可愛らしい娘で、ペタンコな胸でも、いいじゃないか。うん。オタって基本的にはロリっ娘好きだよねぇ～　と、本当はどうせなら巨乳っ娘になって弄り回したいのに、心に欺瞞を抱えて交換申請を出そうとする。だのに、目の前で虚しくボタンが消えて、代わりにあの忌々しいばかりの『貸出中』へと表記が変わった。

「んだよぉ～」

悔しさにリアルに声を上げれば何度目かの視線を浴び、だがそんな事などお構い無しに今度こそはっと気合のままに一覧に目を通す。すると、どうやらこのリストは新着順で並ぶらしく、下の方に沈んでいるのが早い話人気が無い娘な訳だ。だけども、ひょっとして、たまたま流れちゃった掘り出し娘がいるかもしれない。俺は一縷の望みに賭けて『申請の古い順』に並び替えた。するとその中に『Ｒｉｎｋａ＠ｍａｔｅ』の文字を発見した。

「うおっ！　まさか、りんかちゃん！？」

興奮のままに名前をタップすると、お色気ボディと清純っぽさとが絶妙なバランスを保ち、整った綺麗な顔立ちをした『Ｒｉｎｋａ』ちゃんの写真が貼られたプロフが表示された。はっきり言って俺のお気に入りの一人で、ウェブに上がっていた彼女の写真をオカズにシた事もある位だ。

でも、何で彼女の申請が未だに受理されていないのだ？　会員の中で俺以外にファンがいないとか？　いやそれは無いよな、本当にたまたま見逃されていたのか？　その訳は申請条件を見て何となくだが察しがついた。

他のレイヤーさんとの交換条件は大体二時間位の、本当にちょっとした変身願望を満たす的なものであるのに対し、彼女の提示した期間は『三日間』と圧倒的に長いのだ。何しろ今日がこの同人誌即売会イベントの最終日であるから、私生活もちょこっと代行してくれっていうのだから気が引けてしまうのだろう。

加えて『交換初心者大歓迎！』『色んな意味での童貞君だと嬉しいな♪』とか書かれている。このサービスを継続利用している人ばっかだったら、好みの相手が現れなくて交換受理を向こうから断っているのかもしれない。

っていうか、これって俺の為にある募集要項なんじゃん？　肉体的にだってドリームクラブに入店できちゃう位のピュアチェリーボーイなんやし。

自慢にならない述懐をしながら、俺は大急ぎで『申請』ボタンを押し、同人誌のページを捲って『申請の仕方』を読み直す。例を参考にしながらも、もどかしくて推敲もそこそこの挨拶文を添えて送信した。

『申請をお送りしました。相手の返答をお待ち下さい。』

スマホの画面には事務的な文言が表示されている。この後は本当に待つしかなくて、もし受

理されたならば両者の安全を確認して、自動的に意識が互いの肉体へと転送されるらしい。まぁ俺はこのまま軽食コーナーの座席で待つだけだから、次の瞬間にも身体が交換されているやもしれないな。あのＲｉｎｋａちゃんの肉体に！

そう意識したらムラっと激しい性欲が湧き上がり、勃起が止まらなくなってきた。ああでもこんな男性的な生理現象とも暫しの別れなのかもしれないな。そしたら、益々膨張してきて、ヤベ……一発抜きたくなってきちまった。

不意に。

そんな感覚が掻き消えた。いやもう、それどころじゃない混乱が脳内で沸き起こり、前転と後転を繰り返しているような錯覚に見舞われる。もしや、これが解説文にも書いてあったあの……

次の瞬間には感覚がクリアになったかと思うと、纏わりつくような熱気が炎天の支配領域に舞い戻ってきた事を示唆していたし、日陰とは言え明らかに光量が違う。そう。気がつくと俺は一瞬にして屋外へと移動していたのだった。

1.レイヤー・トレード

レイヤー・トレード編

登場人物紹介

Characters

Rinka@mate　…　ナイスバディ系のコスプレイヤー
はるり　…　ロリ系容姿が魅力のコスプレイヤー
アスティ隊長　…　対テロ特殊部隊の女隊長
マヤヤ　…　悪巫女。アスティの生き別れの妹
緒奥田（おおくだ）　宅人（たくと）　…　主人公。本編中に名前は出ない

いやいやいや。テレポーテーション能力に目覚めた訳では無いのですわよ。お姉様。

いきなりの事態に頭が混乱した俺は、そんな意味不明なナレーションを脳内再生していた。けれども現実は落ち着く暇など与えてはくれない。

次に目が入ったのは、自分が握り締めているスマホで……けれども色も機種も違くって、いやいやその掴んでいる掌の方だってピッチリとした艶やかな材質の手袋で覆われていた。手の甲にはゴテっとした装甲らしきものがあってコスプレ衣装の一部だって解るし、全体的なフォルムは見覚えの無い細さで如何にも女の手だ。長手袋から連なる二の腕は細くて白いし、更に視界を掠めたのは自分の胸に備わっている見事な双球の谷間だ！

「うぇ！？」

口走る声もそれまでとは違ったハスキーボイスだ。これって……やっぱり……

コクっと可愛らしく喉を鳴らし、そっと身を寄せる。それだけでもう何と言うか、自分が女の肉体の中にいるんだと思い知らされた。もう感じる全てが今までと何か違う。

「リンカちゃん。休憩中ごめんね！」

いきなり声を投げ掛けられてキョトンとしてしまう。声の主は『聖なる剣の天使』に出てくる『無銘の剣女』エミュリアだ。いや、そのコスプレをした女性だ。半裸が眩しくて見惚れてしまう。そんな彼女が俺に近づくと小声で話しを続ける。

「あんた今、交換手続き終えたばかりの初心者さんよね？」

ぶほっと汚く噴き出してしまいそうになる。

「解ってるとは思うけど、リンカちゃんの身体を借りているだけなんだから……不審を振り撒かないで彼女になりきらなきゃダメよ？　それとコスのキャラにもね！」

「お……俺って今何の……」

「『俺』じゃなくって『わたし』ね？」

「わ、わたしって何のぉ……」

エミュリアは答えず、身振りで俺の手元にあるスマホを示した。

「本物のリンカちゃんからのメッセージが入ってるみたいだから、休憩中にしっかり目を通してね」

それだけ言うと彼女は手を振って去っていき、炎天下へと踊り出ると黒山の人だかりを成している観衆に向けてポーズを取った。忽ちに群れが出来て撮影会が始まる。そう。ここはコスプレ撮影を主目的とした広場な訳で、あっちを見てもこっちを見てもコスプレイヤーとカメコの戦が繰り広げられている。華やかさについ目を奪わそうになるが、いやいやと再びスマホへと目を通した。そこはマイプロフィールの画面だが、表示されている名前が違う。

『名前：鈴井（すずい）　香奈芽（かなめ）　コスネーム：Ｒｉｎｋａ＠ｍａｔｅ』となっていて『貸出中』の文字が躍っている。

リンカちゃんの本名、香奈芽っていうんだ。そのままでもキャラっぽいのに。けれども直ぐ

に本名なんて嫌という思いが湧き起こってきたし、苗字と名前の最初を取って読み替えたのが今のコスネームだと瞬時に察した。

へぇ……これが解説本にもあった『記憶の喚起』というヤツだな。何でも脳ミソ自体は本人のモノを使っているらしく、記憶野の一部かこんな風に繋がるらしいのだ。まぁ、ムズカシイ話は良く解らないわよね。機械の仕組みだって良くは解らないけど使っているんだし、気軽に使用するのが良いと本にも書いてあったが、全くその通りだと思う。

そんな訳でマイページのプロフィールにざっと目を通し、スリーサイズを知って強調された今や自分のモノとなった胸元を見下ろして再び喉を鳴らす。また注意されたら敵わないからと触りたくなる衝動をぐっと堪えて、本人からのメッセージをタップして呼び出す。

『ようこそ童貞君。私の素敵なボディへ☆　お触りしたくなる気持ちは解るけど、今は公衆の面前だという事を忘れないように！』

全くお見通しな書き出しだった。

『後でじっくりと時間はあげるから、その時にじっくりと弄んじゃって構わないからね！』

マジっすか。いやもう屈んでいるから脚に胸が当たって気になって仕方ないんすよ。

『それで今、私が……いや貴方がしている格好は『オカルティックハザード』のアスティ隊長よ。もし作品を知らないなら参考リンクを貼っておくから休憩中に読んでおいてね。この後すぐに聴衆の前でキャラになりきって貰うんだから！』

『オカルティックハザード』は、突如湧き出したＵＭＡに支配されたマツシロシティを舞台にした、サードパーソンビューのシューティングゲームだ。俺もプレイした事はあったし、アスティ隊長はお気に入りのキャラでエロ同人誌だって所持している。

そうか、今身体を覆っている妙なピッチリ感は特務部隊のスーツ姿っていう訳だ。って事は俺、今ハイレグスーツにタイツを合わせて履いているのか！？　まぁ黒タイツの方は視界に入っているし、屈んだ両脚が接してザラっと擦れ合う感じを楽しんでるけど、股間の方は確認出来ない訳だ。けど意識するとアソコにぱっつりと張り付いている感覚がして何だか落ち着かない。

はぁ……それにしても、今の俺はアスティ隊長のコスに身を包んだリンカちゃんなんだよなぁ……すっげぇ見たい。第三者視点で嘗め回す様に鑑賞してみたい。

贅沢な欲求に悩んでいると、正に解決策を握り締めているではないか。そうスマホの内側カメラで自分撮りしちゃえばいいのだ。早速普通にカメラアプリを立ち上げて、普段は使わない『自撮りカメラ』のボタンを押す。するとスマホの画面に屈んで困ったような顔をした女性の姿が映し出された。

肩に届く程度の黒髪をした整った顔立ちの女性、リンカちゃんに間違いは無い。そして自撮りカメラに映るのだから間違いなく俺がリンカちゃんになっているんだと実感する。縦襟が首を細く見せ、続く布地がミニマントになっているが肩まで覆っていないから、一見すると肩出

しのハイネックのようだ。

　そして先程からチラチラと視界を掠める誘惑の谷間は、カメラ視点で見れば一層魅惑的で、というかピッチリスーツの胸下部分のプロテクターは、ゲーム中でも思ったけど明らかに胸を強調させる為だけのものにしか思えなくって、今すぐ谷間にダイブしたい気分になる。しゃがみポーズで強調されるタイツの布地に覆われた太腿に魅了されるし、ロングブーツにも踏まれてみたい衝動に駆られる。更にカメラを回せばピッチリと艶めくヒップラインも素敵だ。

　うぉぉぉ……俺が今、こんな素敵なリンカちゃん……いやもう正しくアスティ隊長の姿をしているんだと感激が押し寄せてくる。『状況確認』なんてゲーム中ボイスまで脳内で鳴り響いてくるようだ。

　いやもう隊長！　本当に状況もっと確認したいです！

　俺が立ち上がるとスマホの中の隊長も動く。なんかいいね。ゲームの世界に入り込んじゃった気分だね。

　そして普通に直立しているだけなのに、なんというか凄く様になっているのだ。もう目が釘付けになって、身体のパーツを一つ一つ観察して見たい。ピッチリ戦闘スーツ最高！　隊長どこまでもついていきますぅぅ

　なんて脳内テンション高くしたのが目立ったのだろう。身悶えている俺に向かって、エミュリアの衣装を着た娘が来襲する。

「アスティ隊長……すっかり準備完了のようですね。戦場にお戻りになります？」
「ええ……参りますわ。エミュリアさん」
ついノリで会話してしまったけど、キャラのなりきりはイマイチだし、心の準備だってこれっぽっちも出来てやしない。だって炎天下で汗だくの男達が大勢取り囲んで、凄い熱気になっているんだぞ。この中に踊り出るなんて、何か色々とイヤな気分だ。
だけどもエミュリアが進めと促してくるし、身体も前に出たくてウズウズしているのが解る。ああもう、コスプレイヤーの意気ってヤツを見せればいいんだろう？
『状況開始！』
底の厚いブーツを打ち鳴らし一歩前に進む。するとフワっとなんとも言えない心地と、ぼゆんっと弾む胸の弾力が襲う。更にはお尻も自然にキュっと左右に打ち震えて……なんだよもう……ただ歩行しているだけなのに心地良いじゃないか！　それに、歩みを進めると近づくデブオタどもの姿は、気味悪いんだけど、視線を独り占めしているっていうのは気分がいい。
きゅっと括れた腰に手を当て最前線（フロントライン）で立ち尽くすと、途端に「写真お願いしまーす」の大合唱が沸き起こる。まったくしょうがない童貞豚どもね。なんてアスティ隊長のキャラとは違うのだが、脳内でそんなコメントしながら腰に置いていない方の手をばっと広げて、何だか解んないけど『一斉射』って感じのポーズを取ってみた。
すると忽ちにシャッターが凄い勢いで切られて、ファインダー越しだったり直接だったりの

視線が身体のあちらこちらに突き刺さる。ゾクゾクっと嫌悪感と同時に快感が湧きあがってきた。なにせ視姦って言葉がピッタリと当てはまる位なのだ。豚どもの視線で妊娠しちゃうぅぅってな具合だ。

それにしても……お前ら胸見すぎだろ！　鑑賞される側になると、本当にドコ見てるのか解るのな。胸とケツと顔と、それに……腋だ。

おいおい。俺の腋がそんなにいいかよ。まぁ確かに俺が見ている側だったら腋コキされてぇ、とか思うな。だけど、こっちの立場にしたら腋にチンポとか挟みたいとは思わねぇわ。いやでも正面より横からのショットのが多くなってるぞ。

そこで俺は鑑賞者側だった時の事を思い返した。こいつら腋と同時に横乳を堪能してやがるんだ。成る程ねぇ……んじゃまぁ。

次に俺は両手を挙げると首の後ろで組んだ。長く柔らかな髪に触れるのが心地良い。そして胸を張ってちょっと腰を捻ってあげれば、正面からの腋、横乳、谷間の全てが堪能できる奇跡ショットの完成だ。いやまぁ、見れないから完成している筈だって所だろうか。

まぁ男共の荒い息が伝わってくるから狙いは成功したのだろう。ちょろいヤツラだぜ！

そういえばゲーム内の設定でも、隊長の胸部装甲が薄い訳は男に対する『視線誘導』が目的だった事を思い出す。特殊部隊といったら敵は大体男ばっかな訳で、その効果の絶大さは身を持って実感させられた。まぁゲーム中の敵は化け物なんで全然有効じゃないのだが。

それにしても、大勢の注目を浴びるのは本当に気持ちイイものだな。ちょっとした仕草の変化にも、すぐに反応してシャッターが切られるし、物凄い熱気が伝わってきて……ああ何だか変にテンション上がってきそうだ！

そいじゃ次はどんなサービスショットを提供しちゃおうかなぁ、何て考えていると肩がトントンって叩かれた。

「隊長。忘れ物を届けに来たよぉ」

言葉と共にいきなり銃底が突きつけられる。受け取ると同時に渡した相手の顔を見れば、ゲーム中に登場する宗教的組織の幹部でアスティ隊長の因縁のライバル、悪巫女マヤヤだった。だから手に取った銃の口をそのまま相手に突きつける。同時にマヤヤも自分の銃をこちらの顔面に突きつけてきた。

いきなり始まったショーに、観衆からどよめきの声が上がる。そして同時に「写真〜」から始まる無数の声が上がったかと思うと、凄い数のシャッター音で掻き消された。

銃を横倒しに構えるのは防御射撃としては良いが、女の細腕だと尚更手振れが大きくて命中率が落ちる。しかし手袋の謎仕様により反動が抑えられるとかで、ゲーム中ではアスティの射撃ポーズがこれだから仕方ない。それにまぁ見栄えがカッコいいからね。

何しろ、俺の眼前には銃を横倒しで構える美少女（マヤヤ）が客観的にどう見えているのか伝えてくれる。いやそれにしても目の前の絶景に心奪われて仕方ない。なにしろマヤヤの衣装は改造巫女

装束で、大きく開いた胸元からはサラシに包まれた小振りな双球がガン見できるし、綺麗な腋も見放題だ。ありがたい、ありがたい。

マヤヤコスの娘はツインに結った髪型が映える可愛らしい童顔で、クリっとした無邪気な瞳が俺の事をジっと見つめているのだ。それはもう文字通り標的を見据える眼だ。勿論俺も同じくらいの熱視線で見返しているから、もう恋のファイヤーに火がつく勢いってなものでバーニングし放題だ。

暫く互いを捉え合うポーズを続けた後、次は背中合わせで銃を構えるポーズに代わり、彼女の体温を感じて益々ドキドキしてくる。炎天下の熱と周りの熱気も手伝って、互いの汗が背中で交わり、ああもうなんだこれ、体液交換なのか？　脳内で百合の花咲く湿地帯が広がっていく。いやもう単に熱射病になりかけてたのかもしれないな。

頭がクラクラし始めた所で、次なるポーズは何故だか抱き合うポーズだった訳で、彼女の細く小さな身体は思っていた通りに柔わっこくて蕩けるような気分だ。汗の香りも何となくフローラルに感じられて、フワフワっと夢心地だ。美少女と合法的に抱き合える役得バンザイ！

まぁ、最後ボーっとしてたのはやっぱ熱中症への前奏曲だった訳で、夢見心地な百合ハグは短い時間で終了となって、俺は休憩場所へと引きあげる事になった。

「お疲れ様ですアスティ隊長……後は俺一人に任せてくださいっす」

去り際にマヤヤがそんな囁きを残した。ボーっとしてたから少し離れて言葉の意味に気づ

き、ハッと群集の前で一人ポーズを取る彼女の後ろ姿を見る。こうしてみる限り普通のようだが……俺は思い出してリンカちゃんの置き去り荷物からスマホを取り出す。肉体交換ＳＮＳ連動のカメラアプリで……マヤヤちゃんの姿を捉えると、画面が切り替わりプロフィール画面が表示された。『コスネーム：はるり』ステータスは『貸出中』だ。

なんという事でしょう。俺は百合の花咲く女同志の園でキマシタワーを建築していたと思ったら、実はオチンチンランドの住人になっていたのでした。訳が解らなくて混乱してきた。騙された気分だけど、良く考えたらこっちも同じだし。それにレイヤーさん達の肉体貸し出し掲示板が賑わってたんだから当然の帰結という訳だ。

もしかしてと思って、周りにいるレイヤーさん達を認識機能で調べてみれば、６割位が『貸出中』表示となっている。世の中マジでどうなっているんだと頭を抱えてしまうが、そんなのは序の口だった。カメラで認識中にたまたま群集のキモいデブ男にフォーカスが合って、表示されたのは『貸出中』の文字だった。

つまり誰かが借りている訳で……もしかして、それはレイヤーさん達が借りた先なのか？

自分の姿を客観視して……カメラで撮って……何か妖しく股間を触っているし……

なんだこの倒錯しきった世界は！？

あくまで想像でしか無いとはいえ、ありえない話では無いだろう。そう疑うと群衆の中にチラっと自分の姿があったような気がする。いや、どうなんだ。後で確認してみるか。

スマホに入っているリンカちゃんからの置手紙に従い、この後の予定を調べてみたところ、コスプレ披露ショーを続けてもいいし、広場を離れて休憩したり会場を散策しても良いとの事だった。正直、今度はこちらからマヤヤちゃんに絡んでみたくもあったし、他のレイヤーさんとの飛び入り競演もしたくもあった。けれどもこの格好のまま歩き回っていいとなったら胸が高鳴ってくる。

それに、ちょっと用も足してみたいしね。

俺は周りのレイヤーさんに声を掛けると、リンカちゃんのお出かけ用肩バックを持って退出した。去り際に悪巫女ちゃんへのエールも忘れない。

熱気園を脱出し再び屋内へと脚を踏み入れ、それだけで温度が下がってきたのを感じたら急に汗が噴出してきた。なんというかその……肉体に纏わりつく汗の感覚も今までと違ってより気持ち悪く……特に下乳の辺りが蒸れるが嫌な感じだ。

いや、意識してみれば股の辺りもなんかムワって感じる。何しろタイツにハイレグ衣装と二重蒸しだ。それにコス衣装も特殊部隊だし黒一色だから熱を帯びて当然だ。という事は今俺の……リンカちゃんのアソコがムレムレになっちゃって大変な事になってやしないかい！？

「むっはぁー！」

興奮がつい漏れちゃって周囲の視線を盛大に浴びる。何せエロイコスチュームを着た魅惑的な女が、いきなり奇声を上げたらそりゃ注目の的だろう。小走りに逃げようにも混雑で抜けら

れないし、男達の邪な視線が身体に突き刺さり捲くりでまた変な気分にさせられる。
だから予定を変更して、いや予定通りの行動の言い訳なんだが、ともかく俺は逃走先の進路をトイレへと決定する。今の肉体で入れる先は……解るよね！
かくして俺は女子トイレへと到る長い列の最後尾へ並ぶ羽目になっていた。
出鼻を挫かれた気分だけど、女子ばっかりの列に並んで男子禁制の場所へと一歩づつ近づくのは、結構良い気分ではあった。それに領域へと入ってからは、洗面台だけでなく鏡が並んだ部屋なんかがあったりして、そこに映る自分の姿は何度確認しても不思議な事にアスティ隊長のエロ格好良い姿なのだ。嬉しくなって何度も見てしまう。傍から見たら自意識過剰な女に見える事だろう。
そう思って周囲を見ると、個室へと到る列に並ぶ何人かは鏡に映った自分の姿をチラチラ見てはニヤけているではないか。これってやっぱり同志なんだろうか。これも深くは追求しないでおこう。
そうして長蛇の列をようやくと乗り越えて、俺は薄ピンクの扉を開いて完全なるパーソナルスペースへと脚を踏み入れた。そして扉を背に凭れ掛かり、バクバクと爆発しそうな心臓を抱えていた。鼓動は胸の中にある訳で、今の俺には立派な乳房がぶら下がっている。身体を交換した時からずっとずっしりと重たくて、存在感たっぷりにぷるぷる揺れて、視界を掠めて誘惑的で、触って弄ってみたかったのに状況が許さなかった乳房だ。

だけども個室に入ってしまえば人目は気にする必要は無い。

コクリっと渇いた喉を鳴らし、俺は視線をゆっくり下へと向ける。身体を斜めにしているから視界にまず入るのはブーツに包まれた足先だった。いや正確には山越しの光景で、見下ろすと何時でも乳房が目に入る。女の子の……リンカちゃんのパーソンビューはこんなにも素敵な光景なのだ。

俺はゆっくりとグローブに覆われた掌を動かし、双球を下から掬い上げた。途端に胸の肉が障害物に当たってひしゃげる感覚がした。それは痛みとかでは無くて、ああ触られているな、という緩い感覚だ。

持ち上げてみると想像より五倍以上のズシリとした重さが掌に乗っかってきて、胸部から肩へと掛かっていた負担は軽減されるのを感じる。ゆっくりと掬った肉を動かして何とも言えない感覚を味わう。なんだこれ……確かに柔っこい乳房を弄ぶのは楽しいし面白いんだけど、別に気持ち良いって訳ではないのだ。まぁ突き詰めれば脂肪の塊なのだから当たり前か。

だけども眼前で弄ばれて形を変える乳房の映像は中々強烈的だし、衣装からはみ出た生乳の部分をプニプニと弄ぶの楽しく、ジンワリとだか微かな快感が生まれてくるのが解る。

その第一の発信源は股間の辺りだったが、第二の発信地は胸の先端部分で、やっぱり胸の感じる場所と言ったら乳首なのだろう。俺は指先で確認するように小突いてみた。だけども想像していたように、敏感に痛みの電流が走るとか、敏感に気持ち良い電流が走るとか、そういっ

た事は無かった。やっぱり『弄られてますよぉ～』っていう類の感覚が生まれるだけだった。但し胸のどの箇所よりもそれは強く、それに周囲を撫でるとかして弄んでみると……段々とその……微かにだが『心地良さ』が湧きあがってきた。

それを意識し出した為だろうか、一気に気持ち良いレベルになって突き抜けて……先端の部分が尖っていくのが感じられて。なんと、乳首が勃起したった！！

それはチンポの勃起時にも似た感覚でもあったが、似ていて非なる『興奮が形に変わる』不思議な感覚であった。しかし胸に密着する薄手の衣装だのに、漫画とかと違ってピンと盛り上がっては見えない。だけども指先で触れば確かに尖っているし、こそばゆい感覚も乳首から伝わってくる。指先も布で覆われているから良く解らなかったけど、これってやっぱりブラ的なものが間に挟まっているのだろうか。そりゃそうか万が一、撮影時に何かあったら事だしな。そんな緩衝材越しでも一度始まった気持ち良さは加速する一方で、乳首からはゾクゾクっと快感が走り抜けていくし、周辺を擦るのまでも感じてきた。いやそれよりも、共鳴するかのように本命部分もジンワリっと仄かに気持ちイイ！

確かめるように片手を股間部分に伸ばす。ペタっとした何も無い股間に着地するのは不思議な感覚だ。だけどもこの向こう側、ハイレグ布の先、タイツ地の奥、そこにある秘境の様子を伺おうとするのだが、文字通りのガードの固さで察知不能だ。それでもグニグニっと指先で刺激して、同時に片手は胸を揉みっぱなしだから気持ち良さが募ってきた。

ああ……俺、女の肉体でオナニーを始めてんだよなぁ。しかも麗しいアスティ隊長の格好をして。うう……見てぇ……客観視してぇ……鏡欲しぃぃ。それでまたピンっときた。こんな時こそ、さっきやったように自画撮り機能だ！

放り出した鞄からいそいそとスマホを取り出す。そしてカメラを内面に切り替えて自分を映す。するとホンノリと頬を染めたエロイ表情の女が現れた。興奮のままに胸を弄れば、モミモミっとスマホ画面中のアスティ隊長も自慰を始める。ううむ。いいけど片手が塞がっちゃうのが難点だ。

それで一旦呼吸を置けば、今度は尿意が襲いくる。まぁ元々アソコを観察して見たかった訳だし丁度良いか。で、傍と気がついた。この衣装で用を足すのはどうすればいいんだろうか。レオタードタイプだし、やっぱ全部脱いじゃうしかないわよねぇ。んふふ……これは不可抗力ですから許してくださいませね。

心の中でリンカちゃんに断りを入れる。そして次は脱衣の仕方に突き当たった。けど解決策は手中にしている。スマホで情報を呼び出せばいいのだ。本人に成りすまして生活を送る上で、様々な問題にぶち当たった時の解決法、それが豊富なマニュアルだ。誰が執筆したのかとか難しい事は考えずに、とにかく専用電子書籍形式で図解入りのソレに目を通す。

首と肩を覆っているミニマントのは……外さなくていいか。そしたらまずはお腹から胸下にかけてを覆うコルセット状のプロテクターを外して……背中でホック留めになっているから、

気をつけないと壊してしまいそうだ。悪戦苦闘しながら取り去ると、何だかすっごい開放感に包まれる。圧迫感が消えてスッキリだ。続いて右腋下にあるファスナーを下ろして、身体に密着した布地をペロンっと外せば、ぽゆんっと乳房が中空にまろび出る。

おおおお……

感動で言葉が漏れそうになるのをぐっと飲み込む。

俺の眼下には大きく形の良いリンカちゃんの生乳が曝け出されているのだ。濃ピンク色の先端部分は尖ったままだ！

堪らずに両手で掴んで捏ね回す。柔らかくて楽しいのだが、手袋の荒い布地で揉み回すのは何だかゴワゴワする違和感がありちょっぴり痛い。だから脱いだり弄ったりの前にグローブを外すことにした。掌部分が指だしグローブみたいになってて、マジックテープ止めだから簡単に外せ、後は手首までを覆うナイロン地の長手袋だから普通に肘の部分から脱いでいくだけだ。元の自分のものとは明らかに違う、細長くスッキリとした掌をうっとりと眺め、しなやかな指先をしゃなりと動かすと乳房の上で躍らせる。

「んはっ……」

小さな吐息が漏れてしまう。改めて生乳房を生掌で触ってみると、今まで以上に柔らかさを感じるしスベスベでモチモチな肌同士が触れ合う感覚がたまらない。何だコレ……おっぱい揉むの最高に楽しい！

そして、さっきまで弄ってたのは何だったんだって位に気持ち良い感覚が湧き出してくる。なんというか快感のバージョンが段違いなのだ。ＷＩＮ３．１からＭＥになった位に。ん？例えが微妙だけど、もう深く考えてなんかいられないから、やむなしだ。

夢中になってモミモミを続けて、快感が貯まっていけば行き着くのは本丸への刺激で、そしたらおしっこしたくなってたのを思い出した。あふっ……女の身体だと我慢する要領が解んなくて……も……漏れそう。

慌てながら半脱ぎだったハイレグスーツを脱ぎ、続いてタイツへと手を掛ける。高デニールの厚手ナイロンとはいえ、加減を間違えると爪先に掛かって破けてしまいそうで余計に焦る。ソレをクリアしたら更にはパンツも履いていた。いや何だこれ……股間にペッタリと張り付く、なんか凄い薄い水着みたいなヤツだ。肌色で装飾もなく素っ裸になったかと勘違いしてそのままシちゃいそうだ。まぁ感覚で履いているのは解ったから粗相はギリギリせずに済んだ。そいつも下ろすと、勢いのままに腰を落とす。流石に女はしゃがんでするしかないって解っていたさ。本当は本能の赴くままの行動だったわけで、相当に危なかったのだ。

ふぅ……

落ち着いたら一気に尿が噴出してきた。用を足すのはどんな時でも原初的な快楽だな。それから一瞬遅れて、俺は今貴重な体験をしているのだと気がついた。何しろリンカちゃんの排尿を肩代わりしているのだ。女となっての初ションベンを今まさに実感している。それは是非目

撃もしておきたい！

だけども出来なかった。見下ろした視線の先に俺が見たのは、柔らかな感触を良く知る大きな胸の双球で……要するに視界が乳房山脈に邪魔されるのだ。

ふぬぬ……っとオッパイを掻き分けたり身体を捻ったりするのだけど、黄金の放物線は見れるのだが肝心の根元部分が見えない。悪戦苦闘しているだけで終了してしまった。そして落ち着いて考えたらスマホで撮影しとけば良かった事に気がつく。だけども、落ち込んでいる暇は無い。女って小便終わった後って拭くんだよね？

ペーパーホルダーをカラカラ鳴らし、心の中でニヤニヤっとしながら千切った紙をアソコに当てる。手加減が解らぬままに適当に擦り、途中で放り投げてじかにアソコを触る。初めて触るマンコに感動も一塩だ。何てったって女の子は、こんな部分までぷにふにの感触だし、溝になっている部分の淵を擦るだけでゾクゾクって来ちゃうし、そんじゃ内側はどうかなっと思ってもやっぱりどことなく怖い。

だからって訳じゃないけど、もういっその事本丸部分に突入しちゃおう。さっきからジワジワっと気になる気持ち良さの中心点、クリトリスと呼ばれている地点に！

感じるままに指先で付け根に触れる。丘の上に建った記念碑みたいな小さな突起物だが、感覚がすっごく凝縮されているのが解る。余りに敏感過ぎて痛い位だが、どんどん慣れていくと男のアレよりも純粋な快感が背筋を走り抜けていく。

はぁはぁはぁ……クリちゃん気持ちいい……おっぱい柔らかい……乳首もすっごく敏感で……うぉぉぉしゃ……射精してスッキリしたい。だけども今の俺は女だからそんな機能はなくて、どんどん気持ちよくなっていくのにどうしょうもなくて……なんだこれ……どうにかなっちゃいそうなのに、どうにもならなくてもどかしい。

そうやって身悶えていた所為だろうか、いつの間にかくぐもった声が漏れていたのがいけなかったのか、目の前でトントンっと叩く音が聞こえる。同時に「大丈夫ですか？」なんて心配の色を含んだ声が聞こえる。

やべぇ……すっかり忘れてたけど、ここ公共のトイレじゃないっすか。いつまでもこんな事している場合じゃないぞ。

「ひゃはぁい。らいじょぶれすぅ」

快感の途中だったからか舌が縺れて全然大丈夫に聞こえない言葉になるし、慌ててどうにかしようとして足元に絡んだ衣服で転びそうになって頭を軽くぶつける。

「あ、そんなに慌てなくてもいいですから、落ち着いてくださいね」

再び外からの優しい声に癒されながらも、落ち着いてなんかいられない。俺は散乱した衣服を手に今度は着用の仕方に頭を悩ませるのだった。

○●○

それからトイレの個室から出られるのには結構時間が掛かっていたと思う。何しろコスプレ衣装を着込もうと手に取ってみれば汗塗れでぐっしょりしているし、弄ってしまったから余計に身体の汗が気になってしまった。鞄からタオルを取り出して拭っただけで「ひゃう」っと敏感状態の肌は感じてしまうし、おっぱい周りの汗とか気になって念入りにしたら……解るだろ余計に弄ってしまう訳だ。

それでようやく出られたならば、並んでいる女子達の視線は冷やかに見えるし、通り過ぎる際に「気持ちは解るけどトイレでのオナニーは程ほどにな」なんて囁きを入れられた。やっぱりココって女子トイレってのは建前なんだな……

洗面台で自分の姿を見て立場を思い出し、そしたら衣装の乱れが気になって直す。更には化粧までも汗で一部崩れているのを発見し、ウォータープルーフなのになぁと記憶のフラッシュバックを感じながら鞄からコスメ用品を自然と取り出していた。自動操縦に身を委ねているみたいで気持ち悪いけど、ここは任せてしまった方が楽だ。

ようやっと女子便所という罠から脱し、それでどうしようかと途方に暮れる。やっぱコスプレ広場に戻るのがいいのかな。それとも当初の予定通り会場内をそぞろ歩いて肉体を見せびらかせるべきか。悩んだ末に、良く考えたらどちらも一緒かと思い、暫く散策する事に決定する。

だけどもちょっと歩いただけで痛い位の視線が突き刺さるし、人混みに入ったら何か……他人の肌が衣装越しに触れて……いやもっとこう……触られている感覚が襲う。

ヤバイヤバイ。これ、痴漢ってヤツじゃねぇの！？

ねちねちっとした汗ばんだ肌で、俺の豊かな桃尻を擦っているのがはっきり解る。いや、そんな感覚に背筋がゾワゾワっと悲鳴を上げる。そりゃまぁこんな体験初めてだし、触ってるの男だろうし、嫌悪感しかしないよな。こっちが大人しくしていれば、段々と『触り』が『揉み』へと進化してないか！？

悲鳴を上げるべきか、さっと手で払い除けるべきか逡巡する。せめて相手をキっと睨んで……俺は背後へと視線を投げかけて……相手の気持ち悪い視線とぶつかって怖気づいた。しかもコイツ、目が合ったのにニヤっと笑い顔を向けてきて……正直、キモイ！

「はぁーい！　楽しんでる？」

なんて小声だけど調子に乗って話し掛けまでしてきた。何なのこいつ？

ナンパなんだろうかと顔を引き攣らせながら視線を逸らし、そこでようやく脳の処理が映像解析を終えて、相手の正体に気がついた。こいつ……俺じゃん！？　って事は……中身は……

「はいはい騒がないで、人混み抜けたら端っこにね」

パニックでオタオタしている俺に対して、彼女は冷静に指示を出す。それにしても、自分の事を客観視した事がないとは言え本当に焦った。あとキモクないです。ちょーかっこいいですわぁ～

通路脇で改めて向かい会えば、不思議な感覚よりも寧ろ嫌悪感が湧き上がる。元に戻ったら

ダイエットしようとか、服装にも少しは気を使おうとか出来もしない目標が脳内に浮かぶ。そんな自己評価の俺に対して、彼女は脂ぎった顔を歪めながら「んふふ……やっぱり私っていけてるぅ～」と高評価だ。まぁ解らないでもないが、コスプレイヤーなんて他人に見られるのを目的とした生業の彼女は、基本的にはナルシストなのかもしれないな。そんな分析をしている最中も彼女はねっとりとした視線で俺の肉体を舐め回す。正直本当気持ち悪くて、これからは視線の置き方に気をつけようと決意した所存です。

「ははは……えっと初めまして……ってのも変かな」

場の空気に耐えられず俺は彼女の艶やかな声で喋ると、彼女は俺のねっちょりした声で返す。

「そうね。自分に会う訳だからね。でもまぁ……初めまして。暫くの間ヨロシクね！」

「はい……でもその……あんまジロジロ見んの止めて貰えませんか？」

「何で？　広場で見られ慣れなかったの？　それとも自分の視線が嫌とか？」

「は……はい……」

「馬鹿ねぇ……これからもっと凄い事になんのに」

「え？」

「これからの予定だけど。別のコスプレ広場に行ってもう一回お披露して、それから一旦着替えてホテルへ移動。そこでちょっとお楽しみした後、別の衣装を持って次の会場に移動ね！」

「え？　次って……」
色々突っ込みたい所はあったけど、とりあえずそこだ。
「あんたら同人誌二次オタって本当に知らないのねぇ……レイヤーにとっては近くの会場でやってる『隣コス』も大事なイベントなの！」
聞き覚えはあったが参加した事はなく、失念していた。けどキーワードに反応して『脳内情報』が『『隣コス』は『隣りでコスプレ博覧会』の略だよ」と伝えてくる。
「それじゃあ早速移動するわよ」
リンカちゃんに先導されるままに通路からガラス扉を通って外に出る。眩しい光に目を細めながら、こんな所も通れるんだなと妙に関心する。庭園エリアと看板が出ていて、遠目でコスプレイヤーと観客の集団が確認出来るから撮影ゾーンなんだろう。けれども先導のリンカちゃんは直行せず、頭上を走る通路を支える柱の陰へと向かうと、急に振り返って俺の身体に抱きついてきた。
「ちょっ、また……」
「んふふ～　柔らかい」
ふためく俺の事などお構いなしに胸に顔を擦りつけ、お尻を遠慮なし揉み捲くる。更には太腿へと滾った股間のブツなんぞを擦りつけてくるので、余計に嫌悪感が全身を駆け巡る。
「リンカさん落ち着いて下さい……」

「いいじゃない。私の身体なんだし。それに我慢できない欲求。解るっしょ？」
「それは解りますけど……こんな所じゃダメですって」
「ちぇっ」
名残惜しそうに身体を離してくる。けど「まぁ続きは後でね」なんて一言添えてきた。
それから庭園撮影エリアにて、本人監修の下での撮影会を執り行う事になった。二度目だから多少は心構えはあったけど、やっぱり多少は緊張とぎこちなさがあった。だけど注目を浴びる心地良さは格別だな。リンカちゃん本人もパシャパシャ撮影していたが、元に戻ったらデータとかお裾分けしてくれるのだろうか。
そうして暫く被写体提供させられた後、俺が連れられて向かったのは更衣室だ。そしてそれは、当然の如く『女子更衣室』だ。おお……麗しの……
だけども想像と違った。いや妄想と違ったというべきか。個室は無理だろうけどロッカーとかあって無防備に肌を晒す女の子が一杯いるとか思ってたのに、ホールに広げられたシートにガムテで目印がついてて、それが個人用のブースとなっているのだ。いや事前にリンカちゃんから説明されてたけど、やっぱ何か違うんだよね。男だったらこの扱いで解るんだけども。
それにまだちょっと早い時間だからか人もまばらにしかいないし、無防備な肌とか見せている女子は確かに居るんだけど、着替えのスピードが何か速いっていうか卒が無いっていうか、事務的で色気なんて感じられないのだ。まぁ、それもそうか。純粋な女性だったら当たり前の

行為だしねぇ……

ちょっぴり寂しくなりながら、俺も途中で預かり所から引き出したキャリーバッグを横倒してスペースを確保する。脱ぐ手順は計らずも知ってるしね。まぁ尤も事務的に着替えるって心境にまで達してないから、ドキワクむひひ……って感じで自分の女体を一人称観察してしまう訳だが役得だね。

着替えは所謂パンツルックってやつで男の時と差が無いので助かった。いや胸部にブラを装着するのに手間取ったが。うーん何か胸の周りに異物感があって慣れないな。

出口で合流して次に向かうのはリンカちゃんが借りているホテルだ。今や俺が借りているホテルな訳で、入れ替わり期間はここで過ごす事になるという。

部屋に到着すると一息つく間もなく、次のイベントへの準備をさせられた。具体的には衣装合わせだ。クローゼットから取り出されたのはチェック地の短いスカートに、これまた裾の短い上衣だ。襟の部分もスカートと同じチェック柄でお洒落ではあるが……

「こんなのも着けるわよ」

取り出されたのは鈍い銀色の大きな円環で、内側が櫛状になっている。

「頭に嵌めるの！」

「ああ～！」

これは所謂『狩りゲー』と呼ばれるジャンルのもので、宇宙に進出した人類が出会ったとある星を舞台にしたものだ。そこで遭遇した蔦がいっぱい絡んだ植物状の敵やら、巨大ミミズといった敵やら、洞窟に巣食うウネウネ触手を持った敵やらと戦って素材を集めたりするそんなヤツだ。そこに登場する爆乳臍出しキャラであるサリナ＝ディスティンバークのコスチュームなんだろう。

ちなみに円環のパーツは孫悟空の冠みたいなモノで、能力向上を建前としてハンターを管理する為に存在している物体だ。命令違反者は締め付けられるような感覚を脳に直接送られるとかで、呻きながら悶えるサリナちゃんのパンチラショットムービーにお世話になったものだ。

「ってか今度は俺がパンチラ提供する側かよ！」

「ん～　それは今の規約だとマズイから、本番では薄いストッキングを履いて貰うわよ」

ほっと胸を撫で下ろし、いや何か違うなと思いなおす。

「はいはい。そんじゃ早速試着して！」

渡された衣装をレクチャーされながら身に着けさせられる。けどこれ上も下も短すぎてなんだか落ち着かない。特に下のほうなんかこのままだとパンツ見えそうで……って鏡に向かってちょっと動いたらチラっと見えた。うはぁ。反射的に嬉しくなってしまう自分が情けない。あれ、それにしてもサリナちゃんだとしたら髪の毛が……

「はい。じゃあ次は頭にネット被ってね！」

長い髪をまとめられてネットで押さえつけられる。何か窮屈な気分だ。それから更にリンカちゃんが取り出して来たのは金髪のカツラで……成る程、そういやサリナは金髪キャラでしたね。ハニーブロンドの艶めく光沢が眩しい。そいつも被って、その上からブラシで梳かれて……頭上を撫でられるような感触が不思議だ。

「はい。これでどう」

ホテルに設えられたドレッサーに映るのは椅子にちょこんと腰掛けた金髪美少女で、エロ可愛い衣装がより引き立って見える。更に変身を完璧にする為にと、リンカちゃんはカラーコンタクトまで取り出してきた。

やだ……入れるの……怖い……

なんて鏡像に心のアテレコをして楽しみ、拒否権は無いも同然だから黙って指示に従う。

「ほぅぉ～」

入れる作業は本当に妙な感じだったが、その効果たるや絶大で、鏡の中の美少女が異国の美少女へと進化を遂げた。いや、マジ青い瞳の中に吸い込まれそうだ。中身が俺だなんて信じられない。

「ひゃっほー！　最高だぜぇ！」

心の声を代弁するように、背後から俺の雄たけびが上がった。実際に口にしたのはリンカちゃんだが、姿は俺の野太い声だし思っている事と一致しているから『俺の叫び』で間違いないだ

ろう。こんな美少女を前にしたら俺は……実際には何も出来やしないだろうが、目の前にいる『俺でない俺』は違った。

「もう辛抱堪らないわ～！」

そんな声を上げると背中越しに俺のスベスベな肩を掴んで引き寄せる。脂ぎった俺の顔が近づき、ギラギラした視線と交錯する。そして無精髭に覆われた口先を近づけてきて「あ、これキスされる流れだ」と感づいた時には唇が触れ合っていた。ねちゃっと気持ち悪い感触と共に唇が抉じ開けられて、荒々しい舌先が乱暴に捻じ込まれる。そして口中を散々に掻き回し、無遠慮に舐り尽くす。息苦しいし何だか臭いし、ねちゃねちゃっと汚らしいし、俺にとっての初キスはちっともロマンチックなモノじゃない酷い有様で涙まで浮かんできた。

「ぷはぁ～　初めてのキスはどうだった？」

入り交ざった涎で出来た銀糸を煌かせながら、俺の顔したリンカちゃんが尋ねてきた。俺は薄ら涙の瞳で睨み、無言の抗議をする。

「ふひひっ　ごちそうさん。でもまだ始まりに過ぎないからね！」

悪びれもせずに言い放つと、リンカちゃんは自分のベルトに手を掛けると素早くズボンを下ろす。そしてパンツも脱ぐと屹立したイチモツを誇示して見せた。他人の視点から見た我が息子は何と言うか、逞しいとかでは無くグロテスクだし汚らしい。

「ほれっ　しゃぶって！」

リンカちゃんは自分にぶら下がった竿を握り、俺の頬へと先端部分を押し付けてきた。もわっと男らしい磯の香りが鼻をついて、ケホケホっと咽てしまうし顔中が汚されたみたいで気分が悪い。

「流石に……それは……ちょっと……」

「え～じゃあ手で扱いてよ。私の柔らかい掌の感覚味わいたいし、その方法ならあんたも毎日してるんだろうし慣れてるでしょ？」

承知しないのならばこのまま顔で済ませるぞとばかりに、頬にグニグニっと擦りつけてきたので、綺麗な顔を汚されたら堪らないから仕方なく引き受けることにした。ついさっきまでは自分にぶら下がっていたモノの筈なのに、やっぱり何だか汚らわしくしか思えない。なるべく見ないようにしながら指先で掴むと、他人になった所為だろうか触りなれている筈なのに全然違う感覚がする。それに逆からスるっていうのも勝手が違って変な感じだ。だけどまぁ、男のモノなんて擦ってやりさえすれば兎に角気持ち良くなれちまうのさ。

「おほぉ～　やっぱこの手でスるより断然気持ちいいよねぇ～」

「リンカちゃん、ひょっとして……」

「ああ。トイレで試させて貰ったよ。だって入れ替わった直後から勃起して痛かったしねぇ。でも君のコレ……仮装包茎で短小で早漏で最悪だよねぇ。おまけにカスがびっしりだし精液は臭っさいし……私、今まで色んな男になったけど最強最悪のカスチンポだよ」

散々な言葉に俺の心のヒットポイントはゼロだ。もし元の状態で彼女に言われたんだったら、罵られ属性もあるから寧ろご褒美なのだが生憎今は俺の姿で男声だ。自分に言われたら誰だって自己嫌悪に陥るだろう？

「うう……でも今はリンカちゃんが、最強最悪カスチンポ野郎じゃんか」

言い返すのと同時に女声で卑語が聞けて両得だ。

「そう。こんなカスチンポにこれから君は犯されちゃうの。心の準備はいい？」

「ええっ！？」

「こんなんで終われない気持ち解かるでしょ？　それに童貞捨ててあげるんだから貴方にとってもラッキーじゃない？」

「いや……でも自分に犯されたい願望なんて無いし……」

「女々しいわねグダグダと！　持ち主である私が今すぐシたいんだから観念なさい！」

言葉と同時に俺のお尻を弄ってきて、反射的に立ち上がってしまったならグイっと凄い力で引き寄せられた。そしてそのまま壁に手をつかされて……お尻を突き出すようなポーズを要求されて……ちょっと待って、このままシちゃうの！？

「当然でしょ！　コスエッチのが男性的に滾るし、何の為にタイツ履かせずにいたと思ってるの？　さぁ……おちんぽイーターの実力みせて貰うぞ、サリナちゃん……」

おちんぽイーターとは、ぬるぬる触手系の敵ばっか出てくる同ゲームにつけられたユーザー

からの隠語で、薄い本でも定番のタイトルだ。そんな男達の欲望に身を捧げる側に立たされている事を、否が応でも感じさせられる。

背後から尻を撫で回されてパンツを無理矢理下ろされて、剥き出しとなった股間の上で太い指が這い回る。ゾクゾクっと駆け巡るのは快感よりも勿論不快感で、視界に相手の姿が見えないのが救いだ。

「まぁ、こんなんでも大丈夫かな……」

男はそう呟くと弾力のある突起物を俺の股間に押し当ててきた。淵の部分に当たっているのを敏感に察知する。ああ……このまま入れちゃう気だ……何て思っている内にズンズンっと陰唇を擦るのが解かる。けど、これ……無理やり過ぎてその……

「ちょっ……痛いんだけど……」

「大丈夫だって意外とヌルっと入っちゃうから。そしたらすぐ気持ち良くなるって！」

有無を言わさず押し込んでくる。ゾワゾワっと陰唇がぬめっとした堅いモノを咥えこんだのが解かった。続いて下腹部に未知の侵入感が広がっていく。挿入されていくのが膣を通してはっきりと解かり、犯されているんだって自覚するとやっぱり嫌悪感しか沸いてこない。

「はい。童貞卒業おめでとさん！」

どうやら俺の肉体が一つの節目を迎えたようだが、それを成し遂げた相手が自分というのは複雑な気分だ。それに対して俺の肉体を現時点で所有している方は、男の攻撃的な快感が気に

入っているのであろう、リズムよく腰を動かし始めた。
「くぅぅぅ……」苦痛が入り混じった俺の声に比べて、「やっぱり私のアソコって気持ちいい〜」と楽しげだ。その間もズンズンっと内側から抉られるような感覚で……ってあれ何だかソレが逆に心地よくなってきた？
感覚の逆転に酔いしれる。けどもそれが起こったと同時に終焉が訪れる。アソコに集中している神経が、入っているモノが脈打ったのを確認した。それからすぐに「んふぅ出るぅ〜」って男の気味悪い呻き声がして、下腹部に爆発が生じた。
「あ〜あ。やっぱ君のって早漏よねぇ」
ドクドクっと大量の精液が流れ込むのを感じる。
「……な……膣内精射！？」
「そうだよ。だって気持ちいいもん」
事無げな口調に絶句してしまう。自分の体に中出しなんて……
「り……リンカちゃんは……いいの？」
「何が？　あ……ひょっとして、孕んじゃったらどうするって事？
大丈夫だよ。だってこの時の為に経口避妊薬を常飲してるもん。
私だってキモオタの子供なんか作る気ないし」
「そ……そうなんだ……」

清々しいまでの宣言に言葉が出ない。
「じゃあ安心したところで続きしよっか！」
「満足してないんすか？」
「あんたを満足させてあげようって言うの。欲求不満でしょ？　鏡見てみ」
言われるがままに壁に向かっていた頭を巡らせて、ドレッサーの鏡を覗き見る。そこに映っているのは腰を突き出し結合している金髪の美少女で、その表情は頬を上気させて恍惚とした瞳を潤ませている。なんてエロチックなんだと意識した途端に、ゾワゾワっと全身を快感が駆け巡って、鏡の中の美少女の口もだらしなく開いていた。
「肉体は感じてるのに男の精神との間に乖離が生まれて、初めてはあんまり感じないんだって？　でもほら、もうシンクロしたでしょ？」
背後から伸びて来た野太い指先が俺のおっぱいをぞんざいに揉んで、そしたら敏感になっていたらしく「あぁ～ん」と甘い声が口をついた。
「んはっ。たまんね……滾る……」
ムクムクっと男性機能が回復していくのが、膣を通して伝わってくる。そしてズンズンっと伝わる振動が快感粒子を生み出してきた。結合部分も然ることながら、乱暴に揉まれる乳房も凄く気持ちいい。それどころか、首筋で這うねっとりした舌触りまでもが、凄くスゴクて……ああ……これが本当の女の快感なんだな……

嬌声を上げ身を悶えさせて、ただただ快感の海を漂い続ける。後ろからガンガンっと激しく突かれるのも楽しく、中出しされるのにも多幸感さえ沸いてきて、最後には自分の方から腰を動かして搾り取ろうとさえする始末だった。

「……はいはい。流石にお仕舞い。そろそろ会場に移動しないと！」

暫く嵌っていた栓が抜かれると、アソコからドロっとした液体が零れ出すのが解かる。途端にモアっと濃厚な雄チンポエキスの匂いが立ち込めて、余りの臭さにケホケホっと咳き込んだ。

つづきは製品版でお楽しみください。